

受託経て自社製品

1991年、高柳真はついに独立を決心した。知人と2人でTRINCCの前身となる「TTT」を設立。高柳が持っていたファクスの独自技術を武器に、ロームから開発を受託した。しかしバブル経済が崩壊すると、大手の開発機能が台湾や韓国へシフトし、TTT

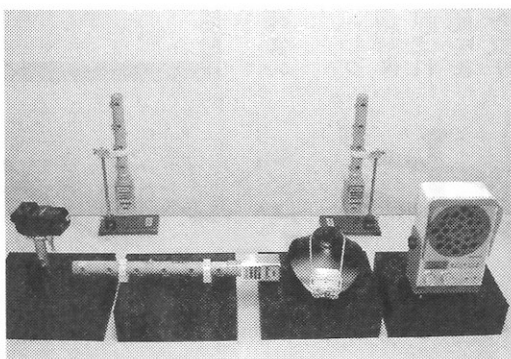
の先行きは一気に視界不良となった。

「受託業は相手先の経営方針に左右される。やはり自社製品を持たなくては」。高柳は決意し、今度は何でも開発屋に転身した。業態転換を対外的に示すため、95年に社名を「高柳研究所」に変更。さらに2003年にこの英語表記から頭文字をとって現社名の「TRINCC」とした。

ホコリ対策

新看板を掲げた高柳はNECのパーチャルリアリティー機器や、トヨタ自動車

除電器を開発



さまざまな形状の除電器

持ち込まれた。

ヤマハ発の悩みは、ボート製造現場におけるホコリによる不良だった。

ホコリの原因

となる静電気を除去するため、除電器も使っていた

が、性能が悪く、高電圧で手が

の「プリウス」向けセンサーの開発など、受注できる

仕事は何でも受けた。そして、後にTRINCCの代名詞にもなった除電器の開発のきっかけは、偶然にも古

巣であるヤマハ発動機から

開発を請け負った高柳は

まず、既存の除電器の分析に取りかかった。従来型は

1万ボルト以上の高電圧をかけてイオンをつくり、圧縮空

気を放出してイオンを飛ばす仕組み。電気の知識がある高柳は「圧縮空気の放出で発生する霧が高電圧の放電針に触れて漏電し、効きの悪さやしびれの原因となっている」とすぐに欠点を見抜いた。

そして従来型には根本的な構造問題があると判断し、装置を一から設計した。まずは高電圧部分と圧縮空気部分を分離。さらに

「大きなボートに使うのでハンディタイプにしてほしい」というヤマハ発のニーズを取り入れ、記念すべき第1号機が完成した。

「商機あり」

「除電器メーカーはあぐ

らをかいている」。従来型を分析した高柳は、「商機あり」と確信し、除電器の開発を本格化した。現在、主力製品に採用されている無風でイオンを飛ばす技術は、同極性イオンが反発し合うクーロンの法則を応用。圧縮空気を使わず、イオンの反発力でイオンを遠くに飛ばしている。

トヨタ自動車の「プリウス」の塗装ラインで不良率16%減、リンナイのガスコンロ塗装では同75%減など、TRINCCには除電器を採用したユーザーから次々と不良低減の成果や喜びの声が届く。

国内で高評価、海外も視野

「世界の工場に正しい除電技術を伝えたい」。日本の成功に自信を深めた高柳の目は、大きな将来性を秘める海外市場へと向き始めた。

(敬称略)

つ勝

中小企業のもものがたり